第4章　階層変動の中のSTOU
ーミドルクラスへの道ー

志水　宏吉

1．はじめに

タイ全土の大学に通う65万人あまりの大学生のうち、約4分の1にあたる16万5千人がSTOUの学生であり（1986年度）、また5万人ほどの大卒者のうち、15%強にあたる8千人ほどがSTOUの門を巣立っていった者たちである（1985年度）[1]。タイ社会の近年の急速な社会変動のもと、STOUは、同じオープン・ユニヴァーシティーとしてのラムカムヘン大学とともに、“大衆高等教育機関”として一定の役割を果たしてきたと見てよいだろう。すなわち、タイの大衆にとってはミドルクラスへの新たな上昇移動のルートとして、またタイ社会全体にとっては大量の中堅的人材の供給機関として、STOUは固有の役割を果たしてきたと言いうるのだ。

本章では、いくつかの調査データをもとにして、ミドルクラスへの移動装置としてのSTOUの実態をより掘り下げてとらえてみたい。STOUにはどのような人々が入学するのか、その動向にはどのような地域差や世代差が見られるのか、またそうした動向は社会の階層構造の変化とどう関係しているか、STOUの典型的な学生のタイプにはどのようなものがあるか。さらにどんな人々が首尾よくSTOUを卒業できるのか、卒業後彼らの夢や希望は実現されるのか、あるいはそれらと現実との隔たりは大きいのか……。これらの問いが、ここで考察される。つまり、ミドルクラスへの参入をあこがれるSTOU学生の実像をできるかぎり、ヴィヴィドな形で描き出してみようというのが本章のねらいである。

なお、ここで主として用いるデータは、われわれが入手することができたSTOUが毎年実施する入学者（83・88年版）および卒業者（87年版）の全数アンケート調査と、われわれ自身が現地で実施した学生・卒業生対象のインタビュー調査から得られたものである[2]。

2．入学者のプロフィールー基本的特性とその変化

まず最初に、STOUには基本的にどのような学生が学んでいるのかという点についてふれておきたい。これについては、すでに苅谷が3章で一定の分析を行っている。繰り返しになるが、そこで明らかにされている事実を列挙してみよう[3]。年齢：20代の学生が過半数を占め、近年若年化の傾向が進んでいるが、30代以上の学生も2～3割存在している。2）職業：かつては公務員の比率が8割をこえていたが、学部・コースの多様化にともなって、民間雇用者の比率が上昇しつつある。3）学歴：大多数は高卒以下の学歴であり、一般大学と比べると職業学校出身者の比率が高い。4）所得：タイ社会全体の雇用者の分布と比べるとやや高いが、比較的低収入の人々にも高等教育機会を提供している。5）地域：一般大学と比べると、バンコク周辺居住者が少なく、北タイや東北タイ居住者の比率が相対的に高い。6）出身階層：農民層

が多く、選抜度指数も高い。7）親の学歴：父親・母親とも、初等教育レベルが5割を越えている。

これらの結果をトータルすれば、これまで高等教育には無縁であった人々に対して、STOUが門戸を広く開放する役割を果たしているということができるだろう。ことばをかえて言うなら、STOUは、これまでの伝統的な大学ではすくいきれなかった人々の進学要求を満たす積極的な役割を果たすことを通じて、タイの新しいミドルクラスの形成に一役買っているのだ。

表1は、1988年度入学生調査から、入学者本人とその配偶者、および本人の父母の「最終学歴」と「職業」とをまとめて整理したものである。表から、本人世代と親世代との間に、きわめて大きな階層的地位上の隔たりがあることが知れよう。まず「学歴」を見ると、STOUに入学した本人およびその配偶者の最終学歴がほぼ「後期中等」教育段階以上に達しているのに対して、親世代では5割以上がいまだ「初等」段階にとどまっている。また「職業」では、本人および配偶者（有職者のみ）の6～7割が「公務員」、「民間」を合わせると8割前後の人々がいわゆる「近代セクター」の仕事についているのに対して、逆に親世代では、7～9割の人々が「農業」および「自営」という「伝統セクター」の仕事についていることがわかる。このギャップがわずか一世代の間に生じているという事実は驚くべきことであり、この過程が、わが国の昭和初期に生じた大きな社会の構造変動と学歴社会への傾斜に比すべきものを有していたことは、7章で考察している通りである。

なお、表4－1に関してもう一点注目しておきたいのは、男女の間での学歴や職業の格差の問題である。結論を先取りして言うなら、タイ社会においては、わが国に見られるような男女間での教育機会・職業機会上の顕著な格差は見られないようである。タイ社会には「男は仕事、女は家庭」といった性別分業意識は希薄であり、今日では女性が仕事をもつことはごく当たり前だとみなされている。表4－1の父親の欄と母親の欄を見比べてもらえればよいが、ここにみられる格差は、わが国の同世代の男女に見られたであろう格差と比べるとかなり小さいものにとどまっているはずである。

表4－1　最終学歴と現在の職業

学　歴	本　人	配偶者	父　親	母　親
初　等	0.1	14.3	57.3	72.5
前期中等	8.0	11.7	12.2	7.0
後期中等	79.2	69.9	20.5	8.5
高　等	12.6	4.2	10.0	12.0

職　業	本　人	配偶者	父　親	母　親
公務員	63.8	62.4	23.2	6.8
民　間	24.4	15.0	5.1	2.0
自　営	5.6	13.8	25.6	35.6
農　業	6.2	8.8	46.0	55.5

（注）　職業の項の配偶者と母親とは無職者を除いた者の中での比率である。無職率は配偶者で11.5%、母親で29.8%である。

さて、STOU学生のマジョリティーは、教育水準もそう高くない農民層の出で、自分の代ではじめて公務員や民間雇用者になったという20代・30代の、いわば“離陸”世代である。彼らが、来るべき21世紀タイ社会の、ミドルクラスないしは中間層の中核をになう存在になるだろうことは、想像にかたくない。第1章で見たタイ社会の二重構造は、彼らの勃興によって、自らの変容を余儀なくされるであろう。その意味でSTOUという教育装置は、タイ社会の近代化への趨勢から生まれた一つの必然であるが、同時に社会の自己変容をもたらす、両刃の剣としての性格を色濃く有していると見ることもできよう。

こうした基本的なSTOU学生の特徴は、時代の進展とともに変化しつつあるのだろうか。この問題を考えるために、作成したのが表4－2である。これは、われわれが手に入れた2つの年度（1983年および1988年）の入学者調査における、学生たちの諸属性の分布を比較したものである。

表4－2　入学者の諸属性の変化の動向

(1) 性　別

	男性	女性	
1983	56.6	43.4	N＝51208
1988	50.3	49.7	N＝50728

(2) 平均年齢

	全体	(男性･女性)
1983	28.7	(30.0、27.0)
1988	27.2	(28.1、26.2)

(3) 民　族

	タ　イ	中　国	その他	NA
1983	92.7	5.3	0.1	1.9
1988	93.7	4.3	0.1	1.9

(4) 居住地

	バンコク	中央タイ	東タイ	東北タイ	北タイ	西タイ	南タイ
1983	17.5	9.2	6.5	22.5	18.6	9.4	16.3
1988	28.1	10.1	8.0	20.1	14.7	7.0	12.1

(5) 職　業

	公務員	民間	自営業	農業	その他	無職	NA
1983	67.0	13.9	4.7	2.4	0.8	8.5	0.7
1988	55.6	21.3	4.9	2.0	3.8	11.0	1.5

(6) 月収(バーツ)

	～1000	1001～2000	2001～3000	3001～4000	4001～5000	5001～6000	6001～7000	7001～	NA
1983	7.8	13.9	32.1	17.8	9.5	4.5	3.1	4.8	6.0
1988	8.6	15.7	31.4	16.5	9.3	5.1	3.1	7.2	3.0

(7) 所属学部

	家政	法	広報	政治	経営	保健	教育	経済	教養	農
1983	4.7	28.1	—	10.5	21.6	4.0	23.5	3.7	—	3.7
1988	3.4	20.2	7.3	5.1	33.3	11.1	11.6	2.1	1.5	4.4

5年間という比較的短いタイムスパンであるため、必ずしも変化の趨勢を明確に把握できるわけではないが、この表からは次のような変化の兆しが読み取れる。まず性別・年齢・民族といった基本的な属性別では、女性の入学者比率が増し、男性とほぼ半分づつの比になっていることが目をひく。また、28.7歳から27.2歳へと、若干だが平均年齢が下がっているという傾向がうかがえる。

その他の項目では、バンコク出身の入学者比率が10％以上伸び、3割近くに達していること、そしてそれに付随するように、公務員の比率が減少し、民間雇用者の比率が増加していること、さらには現職教員の再訓練機関としての色合いが強い教育学部への入学者比率が半減し、逆に実用的な商業知識を授ける経営学部への入学者がかなり増加していることが目につく。必ずしもバンコク出身者＝民間雇用者＝経営学部入学者というわけでもなかろうが、少なくともここから言えるのは、当初もっぱら地方の公務員層を顧客としていたSTOUの“客層”が一定の方向へ広がりつつあるということである。これは、かつては特定の層、すなわち大卒の資格を得ることによって昇進等の官僚組織内での新たな職業達成をめざそうとする公務員層のみが享受していたSTOU教育のさまざまな“効用”に、それ以外の人々、つまり「民間」の人々が徐々に気づきはじめたことを示している。こうした傾向を、ここでは“世俗化”への傾向と名づけておくことにしよう。いずれにせよ、タイ中間層の裾野は、民間部門にまで広がりつつある。

3．入学者のプロフィール－地域差と世代差

先の表4－2で見いだされた主要な変化のひとつは、バンコク出身者の増大であった。バンコクは、ジャガルタやマニラとならんだ東南アジアのプライメイト・シティーのひとつである[(4)]。プライメイト・シティーとは、他の都市と比べて格段に人口が多く、経済・社会・文化的財の集積が見られる首都のことで、そこでは地方・農村部とはまったく異なる社会構造が存在する。そこで次に、STOUの学生のうち、バンコク出身者と地方出身者との間では、属性の分布にどのような違いがあるかという問題をみてみることにしよう。

表4－3がその結果である。順に見ていこう。第一に性別では、バンコクにやや女性の入学者が、地方にやや男性の入学者が多いという結果が見られるが、それほど顕著な差であるとは言えない。対照的に年齢分布では、顕著な差異が見受けられる。すなわち、地方ではかなり若年層に偏っており、全体の4分の3以上が30歳代までで占められている。この原因の一つとしてあげられるのは、高等教育機関のバンコクへの集中、逆に言えば地方在住者にとっての高等教育機関へのアクセスの困難さであろう。バンコクの若年層に比べて地方では、どうしても入学可能性のある高等教育機関の選択肢が限られてくるため、地元で、しかも働きながら学べるSTOUは、多いに魅力のある選択肢として浮かび上がって来るのだろう。また他方、バンコクで、入学者の3分の1以上（36.5％）が40代以上の人々であるという結果も注目に値するものである。われわれのインタビュー調査でも、そうした中高年層の何人かが対象となったが、彼らの生活パターンや入学動機は多彩なものであった[(5)]。

次に学歴を見ると、地方では8割以上が後期中等段階に集中しているのに対し、バンコクでややバラツキが大きいことがわかる。また職業別では、地方に公務員が圧倒的に多いのに対して、バンコクでは民間雇用者が公務員にほぼ拮抗する程度まで増加している。これらの結果を

表4－3　地域別にみた入学者の特性

(1) 性　別

	男性	女性
バンコク	47.1	52.8
地　方	51.7	48.3

(2) 年　齢

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
バンコク	4.4	34.0	25.2	16.4	10.8	9.3
地　方	5.1	41.6	28.5	13.9	6.3	4.6

(3) 学　歴

	初等	前期中等	後期中等	高等
バンコク	0.1	10.1	74.4	15.4
地　方	0.2	6.9	81.7	11.3

(4) 職　業

	公務員	民間	自営	農業
バンコク	49.3	38.7	6.4	5.5
地　方	70.7	17.6	5.2	6.5

(5) 所属学部

	家政	法	広報	政治	経営	保健	教育	経済	教養	農
バンコク	3.0	17.2	10.8	4.5	46.2	6.2	5.0	2.2	2.6	2.4
地　方	3.5	21.6	5.7	5.4	27.0	13.6	14.7	2.0	1.0	5.4

先ほどの年齢分布と合わせると、次のような解釈を導き出すことができよう。すなわち、地方では、高校あるいはその他の後期中等教育機関を出て何らかの役所に勤めている比較的若い層が、昇進・昇給あるいは転職を目指してSTOUの門をたたくことが多い。それに対して、バンコクでは、学生像はもっと多様である。むろん昇進願望をもつ公務員が主流であることに変わりはないが、その他にも、新たなライフチャンスを切り開こうとする若いビジネスマンや、学歴は低いが向学心に燃え、どちらかと言えば非経済的な動機からSTOUでの勉学を志す高年層などを見ることができる。

最後の学部選択にも、そうした基本的な動向に合致した傾向性がうかがえる。バンコクでは、圧倒的に「経営学部」を選択する比率が高く、全体のほぼ半分にあたる46％の学生がそこに集中している。また新しくできた「広報学部」への入学者も相対的に多い。これは、民間雇用者が4割近いという結果と符合するものである。一方地方では、「法」「保健」「教育」といった学部で、相対的に入学者が多くなっているのが目立つ。特に「保健」「教育」学部は、現職の公務員を対象とした再教育機関としての色合いが強く、バンコク以外の地方では、STOUは依然として公務員にとってのスプリングボードとしてもっぱら利用されていることが知れよう。

これまでの結果をトータルすると、STOUの学生はこれまで公務員が中心だったが、近年徐々にバンコクの民間雇用者を中心にした新たな社会層がSTOUを利用するようになってきているという傾向がうかがえる。では、新たな顧客としての民間雇用者は、どのような特徴をもっ

ているのだろうか。入学者調査には、「官尊民卑」の風潮がきわめて強いタイ社会の風土を反映してか、公務員に対しては「教師」「兵士」「警察官」「公共団体職員」「国際機関従事者」といったさまざまなサブカテゴリーが用意されており、どの省に属しているかということまで記入する仕組みになっているのに対して、民間雇用者についてはただひとつのカテゴリーしか用意されていないため、残念ながらわれわれは彼らについて多くの情報を得ることはできない。そこでひとまず、バンコク、地方の別に、入学者の世代別で職業の分布状況をみたものが、次の表4－4である。ここでは、入学者の年齢をもとに、全体のバランスを考えて3つの世代を設定した。「世代Ⅰ」は25歳未満の若年層で全体の44％、「世代Ⅱ」は25歳以上35歳未満の青年・壮年層で42％、「世代Ⅲ」は35歳以上の中高年層で14％をそれぞれ占める。

表はまず、世代が下がるほど、すなわち年齢が下になるほど、民間雇用者の比率が高くなり、逆に公務員の比率が低くなることを教えている。これは、バンコク・地方の双方について言えることである。いずれにおいても、世代Ⅰと世代Ⅲの「民間」の数値を比較すると、若い世代Ⅰの数値が世代Ⅲの2倍以上に達していることがわかる。とりわけバンコクの世代Ⅰでは、全体のほぼ半分が民間雇用者であり、その数はすでに公務員をはるかに上回っていることは注目に値する。また、バンコクと地方とを比較すると、いずれの世代においても、やはりバンコクの方が15～25％程度、民間雇用者が多くなっている。単純に民間雇用者の数値だけを比べると、地方の世代Ⅰ（21.9％）がバンコクの世代Ⅲ（23.0％）にようやく匹敵するという水準である。

いずれにせよ、業種・職種などのくわしい職務内容の内わけは本調査からは明らかにすることはできないが、たしかなことは、若い世代ほど民間に勤務している者がSTOUに入学する傾向が強いという事実である。むろんこれは、ここ20年ほどの間に急激に企業が成長し、ホワイトカラージョブ・ブルーカラージョブの両方が民間部門で急増し、もっぱら若い世代がそこに吸収されているという今日的な労働市場の状況を背景としていることに間違いはない。こう考えてくると、今さらながら、歴史のひとつの転換点にさしかかろうとしているタイ社会の中での、一種の転轍手としてのSTOUの役割の大きさを思い起こさずにはいれない。

表4－4　入学者の職業分布

		公務員	民間	自営	農業
バンコク					
	世代Ⅰ	37.1	49.4	6.4	7.0
	世代Ⅱ	48.6	39.1	6.6	5.7
	世代Ⅲ	67.7	23.0	6.0	3.0
	全体	49.3	38.8	6.4	5.5
地方					
	世代Ⅰ	60.8	21.9	6.8	10.5
	世代Ⅱ	75.7	16.2	4.1	4.0
	世代Ⅲ	85.2	8.2	4.3	2.2
	全体	70.7	17.6	5.2	6.4

世代Ⅰ：年齢が25歳未満の者
世代Ⅱ：〃　25歳以上35歳未満の者
世代Ⅲ：〃　35歳以上の者

世代の問題が出てきたついでに、ここでいわゆる「世代間職業移動」の問題について、若干考察しておくことにしたい。世代間職業移動とは、2世代間、すなわち親と子における職業の異同にかかわる概念である。親から子への職業の継承（ないしは不継承）の問題と言い換えてもよいだろう。一般に安定した社会では、世代間職業移動のパターンは安定しており、他の職業への移動はそう多くないのに対して、変動期にある社会では、世代間職業移動は活発で、親から子への職業の継承は非連続なものになりやすい。ここでは、タイ社会全体の世代間職業移動のパターンを描き出すことはできないが、対象をSTOU入学者に限定し、彼らがどのような移動を経て、今日にいたっているのかという問題を考えてみることにしたい。対象となるのは、あくまでもSTOUという高等教育機関に致達した人々にとどまるが、彼らの世代間移動のあり方を検討することによって、タイのドラスティックな社会変動の一面を明らかにすることはできよう。

表4－5が、1988年度入学者の、世代間職業移動表である。男女にわけた場合もそう大きなパターンの違いは認められなかったので、男女合わせた入学者全体の表を掲載してある。また、出身階層は父親の職業にもとづいて設定してある。まず、表中の左側の数値は、各出身階層からそれぞれの階層へどの程度の人々が移動したかという比率である。たとえば、出身階層が公務員だった者8278名のうち、71.4％が自分も公務員になったというふうに見る。また右側のカッコ内の数値は「結合係数」と呼ばれるものである[(6)]。

この数値が1より大きければ大きいほど、その組み合わせの関連性は強いことを、逆に1より小さくなればなるほど、その組み合わせの関連が弱くなることを意味する。例えば、公務員層出身の者が自分も公務員になるという先ほどのケースの結合係数は1.11となっている。これは、公務員の子が公務員になる確率は何も手を加えない場合、すなわち偶然にまかせた場合（結合係数＝1）よりもやや高い、つまり「公務員の子は公務員にややなりやすい」ということを意味している。この結合係数を算出することによって、どの階層からどの階層への移動が容易だったのか、あるいは困難だったのかという点を検討することができる。

まず比率の方から見ていこう。「公務員」「農業」層出身者ではそのうちの7割強が、そして「自営」層出身者では5割強が、それぞれ公務員になっていることがわかる。それに対して「民間」では唯一、民間雇用者になった者が5割を越え、公務員になった者の数を上回っている。つまり、「民間」以外の3つの階層の出身者は過半数が公務員になったのであり、「民間」出身者が他階層に比べるとそもそも数的に少ないことと考え合わせると、この一世代の間に、タイ

表4－5　職業移動

（％）

父親職業＼本人職業	公務員	民間	自営	農業	
公務員	71.4(1.11)	20.9(0.88)	3.6(0.61)	4.1(0.65)	N＝ 8278
民間	40.6(0.63)	51.2(2.16)	4.3(0.73)	4.0(0.63)	N＝ 1832
自営	50.7(0.79)	30.4(1.28)	14.4(2.46)	4.6(0.73)	N＝ 9111
農業	70.2(1.09)	18.7(0.79)	2.7(0.46)	8.4(1.34)	N＝17793

カッコ内：結合係数

の諸階層全体からまんべんなく公務員が輩出されたという事情をうかがい知ることができよう。特に量的なヴォリュームを考えると、農業出身者が、最大の供給源となったのである。一方、民間出身者では、相対的に子どもが公務員になりにくいという知見も興味深いものである。これは、量的にはそう多くはないが、STOU の学生の中には、一定の“サラリーマン二世”が存在していることを示唆する。

結合指数の方にも、面白い傾向がうかがえる。従来の社会移動の研究においては、同一階層の結合指数は1より大きくなる傾向が強い、すなわちどの職業層をとっても、親から子へその職業が継承される可能性は多かれ少なかれ他と比べた場合大きいという傾向が指摘されているが[7]、この表に示されているのもまさにそうした事態である。つまり、左上から右下に対角線を下っていった場合の数値を見ていただければいいのだが、左上の「公務員」1.11から、「民間」2.16、「農業」1.34と、いずれも1より大きな数値となっている[8]。この結果は、次のように解釈できよう。すなわち、急激な社会変化のもとで、STOU に入学できるといったある程度の社会的上昇をとげた人々の中でも、比率の大小にかかわらず、民間出身者は民間雇用者に、自営出身者は自営業従事者に、農業出身者は農業従事者に相対的になりやすいという傾向は温存されているのである。それはとりわけ、2点台の数値を示している、民間出身者と自営出身者に顕著なようである。この結果は、階層間でのドラスティックな人口移動が続くタイ社会の中においても、特定の職業層においては、自己を再生産しようとする力が働き続けてきたことを示唆するものである。

最後に世代間移動の今ひとつの側面である地域間移動について、簡単にふれておきたい。地方を「中央タイ」「北タイ」「東北タイ」「南タイ」の4つに分け、「バンコク」と合わせて5つの地域カテゴリーを設けた上で、父親の居住地を本人の出身地とみなし、現住地とクロスさせてつくったのが表4－6の地域移動表である。

結果は、一目瞭然である。バンコクの周辺地域という位置づけをもつ「中央タイ」以外の4地域では、いずれも当該地域への残留率91～94％というきわめて高い水準を示している。またその「中央タイ」でも、85％という高い値になっている。この結果は予想をはるかに越えるものであった。上でみた職業移動の大きさと比べると、STOU 学生の地域移動は、思いのほか少ないのである。この結果は、観点を変えると、STOU という大学の、ある意味での“土着性”を象徴するものであると見ることができるかも知れない。遠隔手法によって全国をネットするがゆえの土着性。STOU の性格のユニークさのひとつの断面、ここにも見ることができよう。

表4－6　地域移動

（％）

本人出身地 父親出身地	バンコク	中央タイ	北タイ	東北タイ	南タイ
バンコク	91.7	4.4	1.5	1.1	1.3
中央タイ	11.3	85.3	1.4	0.6	1.1
北タイ	3.9	1.7	93.0	0.4	1.0
東北タイ	4.6	1.6	0.3	93.0	0.6
南タイ	3.6	1.6	0.7	0.3	93.8

4．ミドルクラスへの夢ーSTOUの学生群像

次にわれわれが実施したインタビュー調査にもとづいて、STOUに通う学生および卒業生たちの姿を、スナップ写真風にスケッチしてみることにしよう[9]。彼らの生活の実態および願望は、どのようなものなのであろうか。まずは、公務員たちの生活とSTOUのかかわりから見てみよう。(インタビューの抜すいは章末に掲載してある。)

＜Shot 1＞昇進試験のためにーバンコクの公務員のライフスタイル

K氏は、筆者が行った最初のインタビューの対象者である。インタビューは、バンコク北方の郊外にあるSTOU本部のオフィスで行われた。氏が勤務する造幣局の印刷工場の例に見られるように、タイの職場組織の中では、一定の学歴が、特定の段階で昇進試験のための受験資格になるケースが多い。氏の場合、日本流に言えば係長に相当するだろうか、チーフオブディビジョンに昇進するためにSTOUで学んだわけである。卒業後、一度昇進試験を失敗した彼は、このインタビューの直後に2度目の受験をする予定ということであった。職場内で、数百人のスケールでSTOU学生がいるということから、STOUの学歴が、造幣局という職場の昇進システムの中にしっかりと組み入れられている状況をうかがい知ることができよう。

彼にとって、STOUの学習はまた、昇進の手段以外のメリットをも有しているようである。コミュニケーションの中での社会生活において、STOUで学んだ知識や教養は、人々の信頼を得るに足るものとなっているようだ。1200平米もある家を持ち、夕方は職場のクラブでブリッジに打ち興じるという彼の生活ぶりは、ミドルクラスのライフスタイルと呼ぶにふさわしい内容を有していると言えよう。

＜Shot 2＞ミドルクラスとしてー放送局勤務の共働き夫婦

夫婦そろってインタビューに答えていただいたのが、Sさん夫妻である。場所は、ラジオタイのチェンマイ放送局。同じ敷地内にある全国ネットのテレビ局であるチャンネル11のレポーターをしている。タイの放送局はすべて国営であり、彼らはともに国家公務員である。はなやかな職場であり、お二人とも格好のいいナイスミドルといったところであるが、職場内での競争にはなかなか激しいものがあるようである。S婦人の入学動機は、STOUを卒業することによって昇進を果たしたご主人の活躍ぶりに触発されてということであった。

趣味は、サイドビジネスの保険会社でお金を設けることという婦人の暮らしぶりはかなりリッチなようであり、インタビューを終えたわれわれは、ご主人の運転するBMWに乗せてもらって、チェンマイで一番おいしいカオソーイという郷土料理を食べさせるという店で、昼食をごちそうになったのであった。祖父がかなり位の高い軍人で、息子にも教育をつけたあと立派な軍人になってほしいというSさん夫妻は、いかにもタイ的なミドルクラスのひとつの典型を示しているように思われる。

＜Shot 3＞いなかの学校でー希望の光

同じくチェンマイにおいて、われわれはある日、郊外の農村部にある小学校を訪問した。その学校の5人の教師のうち、校長をふくめた2人がSTOUの卒業生だと聞いたからである。

Hという名のこの村は、世帯数が約100軒、ほぼ全戸が農業（稲作）に従事している。辺鄙な場所にあるため、小学校の卒業生のうち、15キロほど離れたサンカムペンにある中学校に進学する子ども（彼らはウイークデーは、町で下宿生活を送る）は、1～3割ぐらいしかいないと言う。貧しく、十分な教育予算も人手もないいなかの小学校で、同じく農村出身だがある程度の上昇移動を遂げることができた教師たちは、村人と協力しながら、子どもたちの教育に携わっている。

STOUの教育内容は、われわれの標準からすれば、大学で学ぶにはあまりに初歩的かつ実践的すぎるというように思えたが、校長の「コミュニティーとともに働いていくことを教えてくれた」ということばは、地方の学校教師にとってのSTOUの意味を示唆するものとして興味深い。また、実利的な面からも、STOUの学位は、30歳そこそこで校長になる資格を与えてくれるという点で、貴重な価値を有しているということができよう。そして、STOUを努力して卒業した自分たち自身の事例が、お金も教育もない農村部の子どもたちのアスピレーションを鼓舞する“サクセスストーリー”として利用されるのである。

＜Shot 4＞行き止まりを越える－水産試験場の助手

もうひとつ、南タイで出会った事例がこのBさんのケースである。インタビューが行われたのは、ソンクラー水産試験場。海に面して建設された、JICA（国際協力事業団）の出資による政府機関である。190人の職員中、30人の研究者を含む50人が高いランクの公務員、70人が一般公務員、残りの70人が臨時職員であり、彼は一般公務員のうちの一人である。彼のなやみは、今の職場が昇進の道がない行き止まりの職であるということである。そのために選んだのが、働きながら学べるSTOUである。彼は、ソンクラーにある漁業局に職場を変えたいという具体的な希望を有している。

助手としての彼の仕事は、あまり充実したものではないようであるが、卒業後には周囲の彼を見る目が好意的になったと言う。ゴムのプランテーションに携わっている彼の出身家庭は裕福ではなく、彼自身もつつましい生活を送っているが、STOUはそうした彼のような比較的低い階層に属する人々に対する、ステッピングボードとしての役割を一定程度果たしていることに疑いはないようである。

次に、民間の人々にとっての、STOUの意味を考えてみることにしよう。

＜Shot 5＞ビジネスの世界へ－貧しさからの出発

先ほどのケースと同様、Vさんも比較的低い階層の出身である。同じ南タイの出身であるが、彼女は、タイ全体で10～15％ほどを占めていると見られつ中国系タイ人である[10]。　彼女の場合、家庭の事情で9歳になって初めて学校に通い始めたという経歴をもつ。また、彼女が首尾よく卒業できれば、親族で初めての学士の誕生ということになる。中国系タイ人はこれまでもっぱら、ウデと才覚で社会をわたってきた。彼女の親世代の考え方にも、そうした色彩が濃厚に出ている。しかし、彼女の発想は異なっている。ホテルのキャッシャー、自動車セールス会社の事務員をつとめてきた彼女の夢は、大学で知識を得て、フィアンセとともにビジネスを興すことである。

貧しい家庭から、たたきあげでここまで来た彼女は、しとやかさの中にしたたかな強さとたくましさをうちに秘めているように見受けられた。南タイの華僑の町ハジャイで行われたインタビューののち、自由市場に買い物に出かけた時、彼女が見せた交渉力のしたたかさ（値切り方）は、まぎれもなく百戦錬磨の華僑のそれであった。

＜Shot 6 ＞引き目を感じないために－地元の名士・中国系商人

Ｓ氏もまた中国系タイ人である。ただし彼は、われわれがインタビューを行った人の中では最高齢に当たる、すでに功成り名を遂げた人物である。チェンマイの名士のひとりと言ってもよいだろう。兄弟はいずれおとらぬ社会的成功を収めており、氏の４人の子供たちもきわめて高い学歴と社会的地位を得ている。その意味では、彼の家庭は、ミドルクラスというよりもアッパークラスと呼んだ方が適切なほどである。そうした彼が50も半ばになって学問を志したのは、兄弟や子供たち、あるいは商売仲間や友人たちに、学歴という面で、気おくれあるいは引け目を感じたからに他ならない。

彼は、経済的な必要性あるいは上昇移動欲求から、STOU を利用しようとしたわけではない。STOU の実利的なメリットを追求するには、彼は成功しすぎている。彼が欲しいのは、大学卒という肩書がもつ象徴的な価値である。彼の事例は少数事例に属するであろうが、学歴というものが有する社会的機能の多様性を示唆するものとして注目される。

＜Shot 7 ＞広告関係の仕事－バイク修理工の夢

ハジャイの繁華街で行った２人のバイク修理工に対するインタビューも、印象に残るものであった。21歳のＮさんは、そのうちの若い方である。いかにも南方系の、掘りの深い浅黒い顔をした彼は、屈託のない笑顔で、STOU での勉学と将来の抱負を語ってくれた。夜学・建設労働者を経験した彼の夢は、広報学部を卒業して、広告関係の会社につとめることである。趣味は教科書を読むことであり、勉強が楽しくてしようがないといった感じ。友だちの願書を手にいれるために、なけなしの小遣いから30バーツを出したというくだりは、心暖まるものであった。

また、彼の先輩にあたるもう一人の対象者は、26歳、バイク修理点の店長の片腕といった存在で、Ｎさんと同じような階層的背景の持主である。経営学部で学ぶ彼の夢は、店長からのれんを分けてもらい、自分のバイクショップをもつことだと語ってくれた。

Ｎさんの広告関係の仕事にという夢は実現するだろうか。通訳につとめてくれたSTOUの政治学担当の教官は、「むずかしいだろう」とわれわれにささやいた。その意味するところははっきりとはわからないが、いまだ階層間の壁は、全面的に消滅したわけではないのかも知れない。

ここで扱った事例は全体のごく一部であり、STOU学生の類型を十分にカバーしているわけでもない。しかしながら、ここに挙げた７つのケースから、少なくともその学生群像の一端を知っていただけることはできたであろう。

ハジャイでのインタビューの最終日、学生クラブの面々の音頭取りで、とあるレストランで昼食会が持たれた。参加者は、われわれの調査グループと学生クラブのメンバーが十数名。彼

らの年齢・肌の色・職業・身なりなどはまことにさまざまであり、その中には作業服姿の、先にあげた年若い２人のバイク修理工もいた。日本の大学で、あれほど多様な属性をもつ人々が集う大学を見つけることは、まず不可能であろう。また、たとえあったとしても、そうした人々がひとつのテーブルを囲んで、同じ学生という資格で楽しく談笑しながら食事をするという光景を思い浮かべることはむずかしい。いずれにせよ、STOUは、タイの新たな社会構造の形成に一役買っているようである。

５．夢と現実

STOUは公開大学であるため多くの学生をひきつけているが、当然のことながら、すべての学生が首尾よく卒業してゆくわけではない。例えば、1983年度の入学者51208人に対して、４年後の1987年に卒業した者の数は、15021名であった。STOUには、２年生・３年生コースが多く準備されているため、単純にこれらの数値を比較することはできないが、いちおう目安のため比率をとってみると、29.3％という値が出てくる。ここから、STOUの卒業率は、幅広く見積もっても２割からせいぜい４割というところだと思われる。過半数の学生、学業半ばにしてドロップアウトしていくようである。ドロップアウトの理由については、われわれは何の情報も持たないが、表４－７にみる学部・コース別の平均在学年数から、卒業生たちにとっても、STOUの学業を修了することはそうたやすいことではなかったという事情をうかがい知ることができよう。先にあげた事例は、あくまでも“うまくいった”、あるいは“現在うまくいっている”事例であることに注意されたい。現実は、夢で思い描くほどには、甘くないのが道理である。

次の表４－８は、いくつかの属性について、われわれが入手した1983年の入学者と1987年の卒業者との数字を比べてみたものである[10]。先に述べた理由から、これらを単純に比較することには注意深くあらねばならないが、以下に述べるような大まかな傾向を、この表から把握することができるだろう。

まず男女別では、入学者の比率に比べて、女性の卒業率が相対的に高めになっている。考え

表４－７　87年度卒業生学部・コース別平均在学年数

	２年制コース	３年制コース	４年制コース
教育学部	3.28	—	5.19
経営学部	3.33	3.00	4.67
法学部	—	4.18	4.86
保健学部	2.88	—	4.71
経済学部	—	3.70	4.88
家政学部	3.44	—	—
政治学部	—	—	4.18
農学部	3.23	—	4.81
コミュニケーション学部	—	3.04	4.05
平均	3.27	4.08	4.66

表4－8　入学者と卒業者との比較

(1) 性　別

	男性	女性	
入学者	56.6	43.4	N＝51208
卒業者	48.4	51.6	N＝15021

(2) 居住地

	バンコク	地方
入学者	26.7	73.3
卒業者	27.8	72.2

(3) 職　業

	公務員	民間	自営業	農業	無職	その他・NA
入学者	67.0	13.9	4.7	2.4	8.5	1.5
卒業者	79.6	14.2	2.9	—	2.4	0.9

(4) 学　部

	家政	法	広報	政治	経営	保健	教育	経済	教養	農
入学者	4.7	28.1	—	10.5	21.6	4.0	23.5	3.7	—	3.7
卒業者	4.0	11.1	1.4	2.4	21.8	7.8	44.6	0.1	—	6.0

入学者：1983年度の入学者
卒業者：1987年度の卒業者

られるひとつの要因は、女子学生の1割内外が勉強する時間を豊富にとれる主婦であるということである。われわれのインタビューでも、「勉強する時間がないというのが学習を継続する上での最大のネックである」という声をよく聞いた。次に居住地別では、注目されるほどの格差は見られない。予想以上に、地方の卒業率が高いという印象である。これには、各地方に学習センターが整備され、地理的環境が学習継続上の困難になることは少ないという遠隔教育のメリットが大きくかかわっているものと思われる。職業別では、カテゴリーが若干異なる点に注意しなければならないが、公務員の卒業率がかなり高くなっているのが、注目されるところである。先にみたように、公務員にとっては、STOUでの学業の成就は、昇進のチャンスなどの面で死活にかかわる場合が多い。必然的に、勉学への取り組みも、熱を帯びたものになりやすいのであろう。最後に学部別では、入学者の比率と卒業率の比率との間には、学部によってかなりのバラツキがみられる。卒業率が相対的に高い学部は、教育学部・保健学部・農学部である。これらは、公務員の再教育機関としての色合いが強い学部である。一方卒業率が入学率に対して相対的に低い学部は、法学部・政治学部・経済学部である。これらの学部はいずれも、アカデミックな色彩が比較的強い授業が行われている学部である。学生たちの間でも、これらの学部の授業・試験は難しいという評判が定着しているようであった。まとめるなら、女性、公務員、教育・保健・農学部生が比較的卒業しやすいということになる。むろんこれらは、あくまでも程度の問題に過ぎない。

もうひとつこれに関連するデータをあげておこう。職業別に、入学者と卒業者との平均収入を算出してみたのが、表4－9である。卒業者調査にカテゴリーが用意されていない農業を除

表４－９　入学者と卒業者の比較　－月収－

	入学者	卒業者
公務員	3675	5008
民　間	4153	5421
自営業	4732	5681
農　業	3112	―

（単位：バーツ）

く３つの職業階層すべてにおいて、卒業者の平均収入は、入学者のそれをかなりの程度上回っていることがわかる。入学から卒業にいたる数年間の間にいくらか所得水準は上昇するだろうから、それを差し引いて考えなければならないが、それを考慮しても、卒業者の所得はやはり高めであるといってよいだろう。つまり、高所得層ほど、卒業にこぎつける確率が高いのである。これは、同じ職業階層に属している人々の間でも、より経済水準の高いグループ、すなわちより上位にあるグループほど学業を成就させる可能性が強いことを示唆している。

さて、こうしてめでたくSTOUの学位を取得した卒業生たちは、その後自分の夢をどの程度実現させることができているのだろうか。この点に関して、卒業者調査には、卒業後の職場生活についての質問がいくつか用意されているので、ここでそれらの結果を概観しておくことにしよう。

まず、卒業後転職をしたというトラバーユ組だが、これは意外と少なく、回答のあった9081名中、わずか2.7％にあたる247名しかいない。卒業後実際に転職をしたのは、約40人に１人に過ぎないという勘定である。むろん、公務員を中心に多くの者は、昇進を考えこそすれ、転職などもとより眼中にないであろうが、それにしてもこの数値は実感として低いと言わざるをえない。現実は、そう甘くはないようだ。そうした中で、民間雇用者が比較的多い経済・広報の２つの学部では、転職率が１割を超えているのが目を引く（経済：11.0％、広報：14.8％）。逆に公務員によって学生の多くが占められている教育・保健・農・法の４つの学部では、その比率は０から１％台にとどまっている。

この転職率の裏返しと見ることができるのが、現在の仕事に対する満足感である。回答者のうち、84％が「満足」と答えており、「不満」と答えた13％をはるかに上回っている。公務員と民間雇用者を比較すると、「満足」と答えた者の比率は、公務員で89％、民間で78％と、公務員の満足度の方が相対的に高いことがわかる。いずれにせよ、全体のほぼ６人に５人が現在の職に満足しているという結果は、評価しておいてよいだろう。これには、STOUを卒業したことによるさまざまな意味合いでの労働条件の改善がかかわっていると見て間違いあるまい。

一方、職場に不満をもっていると答えた１千名あまりのひとびとに、不満の内容を択一方式で答えてもらった結果が、次の表４－10である。最も大きな不満の原因は、「昇進できない」というもので、全体の約３分の１にあたる32.7％がこれに該当する。以下、回答の多い順から、「職場の制度が気にいらない」（21.6％）、「学んだことと仕事が合っていない」（21.3％）、「賃金が低い」（10.9％）と続く。公務員と民間雇用者とを比べると、特に公務員で、「昇進」にかかわる不満層が多くなっていることが注目される。一方民間雇用者では、公務員にはほとんど

表4－10　不満の理由

	全　体	公務員	民　間
職場の制度が気に入らない	21.6	21.5	24.9
同僚と気が合わない	4.3	4.8	3.5
学んだことと仕事が合っていない	21.3	24.3	15.8
賃金が低い	10.9	7.9	18.0
身分の不安定	4.5	1.5	11.4
昇進できない	32.7	38.1	24.0
その他	1.8	1.8	2.2
無回答	2.9	0.1	0.3
合　　計	1176	795	317

見られない「賃金が安い」「身分が不安定」という不満が出てくることが目をひく。いずれも、職場の現状を反映した結果であると見ることができよう。

これらの不満は、あくまでも全体の13％というかぎられた層の回答であるが、「昇進できない」という項目にもっとも卒業生の不満が集中しているという事実は、STOUの今後を考える上で注意しておかねばならない事項である。

6．おわりに

われわれのインタビュー調査においても、高い昇進・転職願望が語られるのとはうらはらに、実際に卒業後転職した、あるいは昇進したというケースは、意外なほど少なかった。STOUは、ある程度の社会的上昇移動を果たした人々に、さらなる上昇の契機を与えることによって、ミドルクラスの仲間入りのパスポートとなるというブランドイメージを有している。しかしながら実際のところは、学生たちの夢が自動的にかなえられるわけではないく、また職場の現実は、彼らのイメージが描くレベルにまで革新されているわけでもない。夢と現実とのギャップは明白である。

ただインタビューに協力してくれた人々の口から聞かれたのは、決して職場に対する不満やおもいどおりにいかないことへのいらだちではなかった。予想外だったのは、多くの対象者から聞かれた、勉強を続けること、あるいは卒業できたことに由来する、さまざまな形での“副次的”な効果であった。7章において、学歴の象徴的価値(11)ということばで整理されているその副次的な効果は、あるときは自分に対する自信であったり、またあるときは周囲の人々からの信頼の獲得であったりする。こうしたものは、“予期せざる結果”ではあるが、高等教育機関で新たな知識を獲得した彼らは、たとえ職場で直接に報われることが少なくても、一様に、一種の新たな人生の地平を獲得したと言いうるのではなかろうか。大卒の学歴を得た彼らは、その精神的な境地や社会的な位置において、もはやかつての彼らではない。いささか逆説的ではあるが、タイのミドルクラスの形成にとって真に意義深いのは、近代的なジョブがどれほど供給されたかといった経済的要因であるというよりも、もしかすると、こうした資質をもった人々が生み出されるという社会的ないしは教育的要因であるのかも知れない。

注

(1) National Statistical Office, Office of the Prime Minister, *Statistical Year Book Thailand*, Number 35, 1987-1988, p.136, p.140

(2) われわれが実施したインタビュー調査の全貌については、次の文献を参照のこと。遠隔高等教育の国際比較研究プロジェクト・タイ班『タイ国スコータイ・タマチラート公開大学における学生・卒業生の実像（面接記録）』、放送教育開発センター研究報告22、1990

(3) 苅谷剛彦「スコータイ・タマチラート公開大学の学生・卒業生」　『Beyond Distance ータイ国の学歴社会化と遠隔高等教育』、1991

(4) 松薗祐子「タイの都市化・都市社会」、北原淳編『東南アジアの社会学』世界思想社、1989、273頁

(5) インテンシブなインタビュー調査を実施した対象者のプロフィールについては、注(1)の文献の48－50頁にまとめてある。

(6) 結合指数は、セルごとの実測度数を、期待値で除して得られる数値である。その利用法と留意点については、次の文献を参照のこと。安田三郎『社会移動の研究』東京大学出版会、1971、74－88頁

(7) 同前書、76頁

(8) 最大階層である公務員の数値が1をわずかに越えるだけであるのは意外な感じがするが、安田は、ある階層が急激に拡大しつつある場合に、こうした事態が生じやすいと指摘している。

(9) 以下に引用する文章は、注(1)の文献のインタビュー要約集からの抜粋である。

(10) STOUには、4年生コースの他にも、多様な2・3年生コースが設置されており、1987年の卒業者の母集団が、必ずしも1983年度の入学者と一致するわけではない。

(11) 吉田文「学歴主義の拡張期における人々の意識」　『Beyond Distance ータイ国の学歴社会と遠隔高等教育』、1991、43－47頁

＜Shot I＞

・インタビューのバックグラウンド：Kさん、43才、男性、ノンタブリのSTOUから車で5分のところにある。77年に建てた自宅に住む。バンコク銀行の印刷工場（造幣局）に勤める。そこは政府が出資するが政府とは独自の資金運営を行う工場で従業員は約950人、彼はフォアマンをしているが、具体的な職務内容は閉ざされた部屋でできあがった紙幣の数を管理する。孤独で神経を使う仕事、工場の職種は7段階に分かれ、最上位が3人のハイエストディレクターズ、次が10人のバイスディレクターズ、3番目が10人のチーフオブディパートメント、次が50人のチーフオブディビジョン、フォアマンが150人、一般のワーカーが約580人、最下位が150人のレイバラーズ。ワーカーからフォアマンになるための試験には学歴は必要でないが、チーフオブディビジョンになるためには学位が要り、彼はその学位を得るためにSTOUで学んだ。彼は高校を出てすぐにセールスマンとしてバンコク銀行に入り、昇進のために初めの2年間短大クラスの夜学で学んでサーティフィケイト・オブ・ハイヤー・エデュケーション・サブジェクトを取った。家族は7人で、本人と38才の妻、30才になる妻の妹、26才の長女、18才の長男、16才の次男とメイドが一人。長女のみが先妻の子供で息子達は今の妻の子供。妻は私企業でフルタイムの従業員をしており、月収3500バーツ。本人は月収16500バーツ。本人の父は法学の修士号を持ち、最高裁判事を勤めて28年前に亡くなった。母は中卒で主婦。父は西タイのラチャブリ、母は東タイのプラシンブリ、彼自信は中央タイのナコンソワン出身。

・STOUでの活動：83年入学、86年卒業。法律でＢＡ取得。

入学動機は、かねて勉強したいと思っていたところにちょうど近所にSTOUが設立されたか

ら。昇進のためにという外的な動機もあった。学習場の問題点は、試験がむずかしかったこと。試験対策としては、チュートリアルに欠かさずに出てたり、友達と一緒に勉強したり、父の仕事の関係で家にたくさんあった法律の本を片っ端から読んだりした。STOUで学んだ知識自体は今の仕事に役立っていないが、学位は昇進試験の資格として役立っている。彼は今ビレッジコミッティの副会長をしているが、その仕事をしていく上で、大学を出たことが周囲の人々からの信頼にもつながり法律知識も役だっている。友人にもSTOUでの学習を絶対勧める。職場の950人中少なくみても200人はSTOUで勉強している。

・日常生活：週休２日。週日には５時半起床、15年前から続けているジョギングや庭の手入れをして７時に妻とバイクで２人乗りで出勤、７時半に職場で同僚と朝食、８時から４時まで15分の休憩と１時間の昼休みをはさんで働き、終業後は工場付設のクラブで２日に１回はブリッジやチェスをして楽しむ。ブリッジは彼の最大の趣味であり、18年前に始めて１年間ブリッジ学校で学んだ。74・75年にはバンコク銀行で連続優勝した。休日には家に人々が集まって庭でペタンク、ピンポン、バトミントンなどをして遊ぶ。家の敷地面積は1200平米もある。カラーテレビは最初の１台を71年、２台目を84年に買ったが同じ時にステレオも１台ずつ買った。ビデオは79年に村で初めて買った。書斎・勉強机あり。冷蔵庫は２台目を80年に買い、洗濯機は去年初めて買った。車は81年に買った中古のバイオー404。通勤はオートバイクなので車は郊外に遊びに行くとき使う。たくさんお金があったら海岸に別荘をつくりたい。５年後には勤続25年で恩給がもらえるので仕事をやめて民間企業、例えば東芝に天下りしたい。STOUは、彼自身の愛着として、さらに意欲の点で高く評価している。工場にいる27名の卒業生も勤勉に働いている。

＜Ｓｈｏｔ２＞

・インタビュイーのバックグラウンド：Ｓさん、42才、女性。ラジオタイのチェンマイ放送局で会計とラジオ番組製作に携わる。バンコク生まれ、68年に商業高校を卒業し、１年間バンコクの会社で市場調査の仕事をしていた。その後チェンマイのラジオタイに入社し、20年を経る。若いときの憧れでチェンマイに来たくて、入社時に広報の役所に願いを出して受け入れられた。現在Ｃ５、月収6000バーツ。副業としてタイサムット保険会社のマネージャーを10年前からしているが、そちらの月収は14000バーツ。祖父は陸軍の将校、両親ともバンコク出身。父はタマサート大のＢＡを持ち、教師をしばらくやったあとポリスオフィサーになり、大佐の地位にまで至った。母は看護のディプロマを持ち、主婦。兄弟９人。１番目の女性は高卒で、バンコクで小学校教師。２番目の女性も同じ。３番目の男性はビジネスのディプロマを持つ。４番目の女性はＢＡを持ち、教師。５番目は本人。６番目と７番目は双子で、６番目の女性はシニアディプロマを持つ主婦、７番目の女性は高卒で教師。８番目の男性はフィリピンの大学とカセサート大でそれぞれＢＡを取り、医者。９番目の女性は障害者で教育歴なし。

・STOUでの活動：87年に広報学部の４年コース入学。現在96単位を取得、あと６科目を残す。入学動機は、より多くの知識を得てより高い地位に昇りたいから。夫がSTOUで学んでテクニシャンからリポーターに昇進したため、自分も会計係からプロデューサーになるためＢＡを取りたい。プロデューサーはＣ３からＣ９までで今10人おり、ＢＡが必要。以前は収入をあ

る程度得るために忙しすぎて考える余裕がなかったが、２年前になってようやく安定を得て、昇進したいと痛切に思うようになった。勉強は１日１時間程度。今試験準備で忙しい。
現在の仕事は、会計と、週に５回夜の８時半から９時までの音楽番組の製作・放送であるが、この仕事に対してSTOUの授業は非常に役だっている。知識を番組づくりに活かすことができるし、自分自身のパーソナリティを良くするために知識を用いることができる。夫が卒業後得たメリットは、レポーターになれたことと、彼に対する周囲の見方が変わって威信が非常に上がったこと。STOUと伝統的な一般の大学の価値は変わらない。どこの大学を出たかは関係ない。特に現時点では、マスコミに関するカリキュラムやそれによって得られる実力の点ではSTOUがいちばん。

・日常生活：仕事は週休２日。余暇は勉強、テレビ、ショッピング、郊外に出かけること。家には部屋が４つあり、メイドが１人いる。テレビは居間・子供部屋・寝室に１つずつあり、１台目は10年前に買った。冷蔵庫は２台あり、１台目は20年前に買った。洗濯機とエアコンはそれぞれ１台で84年に買った。車は86年に35万バーツをはたいて中古のＢＭＷを買った。生活費は、月の支出が１万５千バーツ、食費が６千、娯楽費が２千、衣料費が２千、教育費が1500、光熱費が千、その他。趣味は保険会社で儲けること。お金があったら寺か財団に寄付して困っている子供たちを助けたい。時間があったら世界一周旅行をしたい。これまでにも香港、フィリピン、台湾などに夫婦で出かけている。子供には少なくとも大学は出てほしいが、学部や進路の選択は彼らに任せる。自分の希望としては、娘には放送関係、息子には立派な軍人になってほしい。子供にはふだん、一生懸命勉強すればそれだけ将来の役に立つと言っている。息子はかなり勉強ができるので、できれば博士号を取ってもらいたい。

＜Ｓｈｏｔ３＞

・バックグラウンド：校長先生は32才、ランクはＣ５。78年にチェンマイ・ティーチャーズ・カレッジのディプロマを取得し、在職10年。サンカムペン出身で両親は10ライ程の米作農家。弟が５人おり、本人を含めて４人が高卒以上、２人がＢＡを持ち、１人がディプロマを持つ。STOUには80年に教育学部入学、83年にＢＡ取得。入学動機は、ティーチャーズカレッジで学びたいと思っていたができなかった学校経営の講座がSTOUに開講されたこと。女性の方は30才、ランクはＣ４。78年にチェンマイ・ティーチャーズ・カレッジを卒業。サンカムペン出身で生家は３ライの米作農家。両親は学校教育を受けていないが父は読み書きができ、母は父にやや劣る。兄弟は６人で、そのうち本人を含めて４人が高卒以上、兄の１人が僧侶で教員資格を持つ。STOUには84年入学、87年卒業、ＢＡ取得。入学動機は、前任校の同僚が何人か学士号をとったことに刺激されて、自分もＢＡをとりたいと思ったから。この学校には在任３年。

・STOUの教育について：両者とも、STOUで学んだことは具体的で実践的な教授方法の向上、たとえばチャートやスライドの利用法などに役だっていると考えている。田舎の小さな学校に対するSTOUの意味としては、校長は、STOUの教育が自分にコミュニティーとともに働いていくことを教えてくれたと考えている。田舎の小さな学校だが中央政府の実質的な援助は期待できないので、共同体の中で人々との協力が不可欠となるから。STOUの教科書の内容は、校長は、適切だと考えているが、女性は適切だが内容が多すぎる傾向があると述べた。女性の

方は友人と一緒に教科書を開いてその内容について話をしたこともあるが、その友人の感想としてはティーチャーズカレッジの教育内容よりもSTOUのほうがよりアカデミックで難しく、レベルが高いと。小学校の生徒たちにSTOUについて話すこともある。貧しくて近くに大学がなくても、自分たちも公開大学を卒業したんだから君達も利用できるんだよ、と。

＜Ｓｈｏｔ４＞

・インタビュイーのバックグラウンド：Ｂさん、26才、男性。Ｃ２のリサーチアシスタント。資料収集、分析、報告を行う。この職務は研究所中彼一人。出身はソンクラ。家族は両親、兄、兄の妻、そこの子供が２人、本人。最近本人は職場の宿舎に１人で住んでいるが、家にもよく帰る。勤続２年。父と中卒の兄は、他の１人とともに30ライのゴム園経営。母は主婦、両親は小学校卒。家族の月収2000バーツ（中の下）。

・STOUでの活動：87年、入職と同時に入学。２年制の農業コースを89年に終えたばかり。ＢＡ取得。勉強は１日２時間、STOUのテレビは家になかったのでみなかったがラジオはしばしば聞いた。職場での昼食後の休み時間と、夜家で９時すぎから勉強した。チュータリングには、教師の重要な部分の指摘を聞くために毎回出席。入学のきっかけは、広告を見たことと、仕事を通じ勉強に必要なお金が稼げたこと。月収は現在3400バーツ、うち3000バーツは自由に使える。学習上の問題点は、理解困難な科目があったこと。チュータリングをもっと増やしてほしい。試験対策は、教科書を熟読したこと、練習問題をしっかりやったこと、カセットやラジオを繰り返し聞いたこと。教科書は文句無し。ラジオ番組のいくつかは難しい。STOUの授業の効用については不本意な点がある。それは、仕事の内容と勉強内容がほとんど合致していないことと、昇進や昇給につながらなかったこと。まもなくＣ３に昇進するが今の職場ではＣ４になれないので、ソンクラの農業省内の漁業局にかわりたい。そこなら家から通えて昇進もできるし、勉強内容を活かせると思う。しかし同僚や上司が自分を見る目が好意的になったし、STOUについて相談されるようになった。友人や同僚にも勧めている。

・日常生活：週休２日。仕事のある日は６時半頃起床、朝食を取って８時すぎ出勤、４時半まで仕事をしてから同僚とスポーツ、６時に帰宅して７時半に夕食、後は家族と話したり友達と遊んだり。今持っている電気製品は、ラジオ・電気ポット・アイロン・扇風機。自宅には、１年半前に買ったカラーテレビ、去年買った冷蔵庫がある。お金があったら家族の生活をもっと良くして、自分自身のサイドビジネスにも投資したい。将来は、STOUの学位を活かせる職につきたい。

＜Ｓｈｏｔ５＞

・インタビュイーのバックグラウンド：対象者はＶさん、女性、27才。親の借家で母、本人、甥が同居。10人兄弟の末子。10人中、高卒より上の学歴を持つ人は、一人もおらず、高校を出ているのは自分とすぐ上の兄だけ。父は中国生まれ、母はタイの南タイのトラン生まれの中国系タイ人。本人はナコンシタマラート生まれ。家は子どもが多くてたいへん貧しかった。両親はほとんど教育を受けず、タイ語の読み書きもほとんどできなかった。父はゴム園労働者、母は主婦。たいへん小さな家に住んでいた。彼女は84年に22才で高校を出たが、その理由はタイ

で学校システムの変化があったこと、彼女は９才から学校にいき始めたから。卒業後初めはホテルでキャッシャーの仕事をしていたが、現在は車のセールスの会社で事務員をしている。転職して給料と休みが増えた。現在月収１万～１万２千バーツ。売上で給料が変動する。

・STOUでの活動：86年入学、90年10月卒業予定。受講は経営学部のビジネスコース。入学動機は、知識が欲しかったこと、よりよい仕事につきより良い生活をおくるため学歴が欲しかったこと、家族で始めての学士になりたかったこと。STOUを選んだ理由は地域を離れないでいいから。卒業後はビジネスの知識を活用して自分で車の販売関係の会社を開きたい。来年結婚予定の婚約者も車のセールスをしており、２人でビジネスを始めたい。婚約者はタイ系タイ人で技術学校卒。婚約者にもSTOUを勧めている。兄弟中３にはタイ系タイ人と結婚しており問題はない。学生グループには、グループ学習に参加して友人を得たかったため参加している。学習上の困難は、数学や統計学はむずかしいのにチュートリアルを提供してくれなかった。カラーテレビは10年前、ビデオは去年、２年前に冷蔵庫を買った。車は84年のトヨタのピックアップトラック。学士号をとろうと思ったとき、ラムカマヘンにするかSTOUにするか迷ったが、家が投資してくれなかったのでSTOUにするしかなかった。家族は教育に投資するより土地などに投資したほうがいいという意見を持っていた。中国系でも若い人々は考え方が変わってきており高学歴化しているが、親の世代はまだお金への執着が強い。彼女は一般教育とビジネス教育の両方が重要であり、学歴よりも個人の実力の方が大事だと考えている。彼女は教育は結局職業にも役立つと考えているが、母はそうではなく、特に女性は高い教育を受ける必要はないと考えていた。兄弟にも学校はあきらめて働いたほうがいいとアドバイスしていた。将来子どもができたら、最低でもＢＡ、できるだけ高い教育を受けさせたいと考えてる。男の子ならビジネスを学ばせて自分達の仕事を継がせたい。そうすることでより豊かになれるし、老後の面倒を見てもらえるから。できれば伝統的大学がよい。女の子なら看護婦にしたい。

＜Ｓｈｏｔ６＞

・インタビュイーのバックグラウンド：対象者はＳさん、61才、チェンマイの卒業生グループの会長。チェンマイ・ロータリークラブでも役職についている。手広く商売をする傍ら、家庭裁判所のアソシエイト・ジャッジ、タイ社会福祉全国委員会の委員、チェンマイ大学やタイで最初の私学であるパユップ大学の委員会メンバーなどを兼ねる。チェンマイのメインストリートに立派な文房具店を持ち、その２階に住む。ここは妻の実家で、自身の生家はすぐ近くにある。北部タイでは結婚後妻の実家にはいるのが伝統的パターン。文房具店の他に染め物工場と繊維のプリント工場を持つ。これらを合わせて従業員は約150人弱。収入は月額１万2500バーツ。数年前に101才で亡くなった父は、20才の頃中国の広東省からわたってきた。母はタイ人。両親の学歴はどちらも初等教育。父はわたってきてはじめは農民をしていたが、それから雇われ人になって、しばらくして建築資材を売る小さな商売を始めた。

本人の教育歴は、小学校は中国系の私立に入ったが戦争中のため政府に閉鎖されてしまい、中学はプリンス・ロイヤル・カレッジというミッション系の私学に入ったがこれも政府に閉鎖されてしまった。高校はモーファットカレッジという私学に移った。高卒後すぐビジネスの道にはいる。中国人コミュニティーはチェンマイで数百家族が属し、バンコクよりは規模が小さ

いがタイ全国でみられるもの。今はコミュニティー内での絆が弱まりつつある。本人の兄弟は13人で、１番上の姉が80才くらい、一番下が40才くらい。チェンマイないしバンコクに住み、全員が健在。そのうち男性は４人。兄は養子で、学歴は高卒くらい、バンコクでビジネスをしている。２番目の男子は本人。３番目はチェラロンコン大学を出て自然資源省の役人で、サキソフォンの優秀な奏者（趣味）であり、かつプレム元首相の側近。４番目もチュラロンコンを出て大きな電機商で２番目の地位についている。弟２人がチュラロンコンに行けたのは、父と長男であるＳ氏が働いて学費を出したから。

・STOUでの活動：入学動機は、家族や交際相手に高学歴の人が多いので必要を感じたことと、友人である学習センターのセンター長がわざわざ応募用紙を持ってきて強く勧めたこと。82年入学、86年卒業、学部は経営学でＢＡ取得。当時は毎日早朝１時間半くらいは勉強した。学習上の困難は、忙しくて時間がなかったこと。試験はどれもとても難しかったが何とか終えられて自信がついた。学位によって、威信と自分自身の気持ちの面でメリットがあった。かなり大変だったので、さらに修士号をとる気持ちはない。

・日常生活：今は趣味のゴルフに集中したい。ゴルフは親族皆で週３、４回はする。ハンディはかつては13までいった。35歳の時から、ゴルフ・歌・社会奉仕・英語などを始めた。余暇にはゴルフをしたりテレビを見たり、手紙の返事を書いたりする。自宅と職場にファクスが２台、カラーテレビとビデオが２台ずつ、エアコンは寝室に１台、洗濯機はメイドが３人いるからいらない。もっとお金があったら財団をつくって貧しい人々のための奨学金制度をつくりたい。現在でも毎年１万バーツをSTOUに、１万バーツをチェンマイ大に、数千バーツをチェンマイの教員養成カレッジと私学のパユップ大学にそれぞれ寄付している。時間があったら役職を人にゆずってゆっくりゴルフをしたい。また社会福祉活動をもっと積極的にやりたい。チェンマイの友人たちが各政党で要職についているので、自分は政治活動に首を突っ込まないことにしている。

＜Ｓｈｏｔ７＞

・インタビュイーのバックグラウンド：対象はＮさん、21才、男性。自宅からバイク修理店の職場に通う。家族は今は両親と本人の３人だが、妹が２人おり、今はそれぞれ結婚してハジャイに住んでいる。上の妹は小６、下の妹は小４の学歴、本人は88年にインフォーマルな夜間学校で高卒の資格を取った。比率で言うと彼のようなケースは１割未満。今の店で働き始めてからまだ１ヶ月。それ以前は、中学を出てから建設労働者を２、３年やり、最近はカーステレオのセールスマンを数カ月やったあと、人の紹介で現職についた。今の店には修理工が６人おり、いちばん長い人で３年目。彼らの間にランクはなく、給料は勤続年数と修理技術によってきまる。本人の月給は1500バーツ。経験三年目の人手2400バーツ。父は役所にランク無しの労働者として勤め、母はある職場で事務員のような仕事をしている。月収は両親がそれぞれ2100バーツ。父は小学校卒、母は学校を出ていない。父はソンラク出身、母と本人はパタルーン生まれ。

・STOUでの活動：88年に広報学部の４年コース入学。成績は平均的、勉強時間は１日２時間。STOUのテレビ番組はときどき、ラジオは聞かず、カセットは聞く。チュータリングには非常にしばしば出ている。自分の机はないのでソファで勉強する。入学動機は、STOUが便利

なことと、余暇を有効に使いたいこと。広報学部を選択したのは、将来広告関係の仕事をしたいから。学生グループには参加している。学習上の問題点は、テキストその他の情報が非常に遅いこと。試験対策は、教科書を全部読んでノートを取り、繰り返し勉強すること。テキストは、レベル的にはまあまあだが、ときどき内容が詳しすぎることがある。チュートリアルは、全般的にはまあ良いが、テキストが全員にゆきわたらないことがしばしばある。また、チュートリアルのテキストが、ある場合には限定されすぎていて短すぎたり、ある場合には時間数の割に無いようが詰め込みすぎ出ついて行けなかったりする。テレビで英語の番組を見ることはあるが、難しすぎてついてゆけない。STOUの教育内容は職業生活にも日常生活にも役立だたない。友達にSTOUを勧めたとき、自分で願書代の30バーツを出して取り寄せてあげた。STOUによって、周囲の人々と普通に話をし、ノーマルな関係を持てるようになった。

・日常生活：6時起床、8時から夕方6時まで仕事、ただし仕事が多いときには9時～10時になることもしばしばある。休みは日曜だけ、余暇は勉強したり友達と合ったり。趣味は教科書を読むこと。88年に買った白黒テレビ、86年に買ったラジカセ、87年に買った冷蔵庫、87年に買ったバイクがある。他の物はなし。お金があったら2階建ての自分の家を持ちたい。